

Title	出口勇蔵著 ウェーバーの経済学方法論
Sub Title	
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.2 (1965. 2) ,p.154(72)- 155(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19650201-0072
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650201-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

出口勇蔵著

『ウェーバーの経済学方法論』

本書はウェーバー生誕百年を機に、長年ウェーバー研究の先達の一人であった著者が、これまで発表してきた四つの独立論文を一書に収めたものである。第一の論文は、本書の標題と同じ「マックス・ウェーバーの経済学方法論」であって、本書の半分以上を占めている。ウェーバーに関する他の二論文は、雑誌「思想」に、他の一論文「歴史学派」は東洋経済新報社の「経済学大辞典」に発表されている。

著者のウェーバー研究の特徴は、ウェーバーの思想像をその広汎な思想的背景の中から浮かび上げようという接近方法であるといえよう。それは、ウェーバーの経済学方法論を、その人格、その時代の精神とのかかわりあいの中でとりあげる、という意味で、社会思想的接近、より固有には、歴史哲学的

七二 (二五四)

接近といつてよいかもしれない。それは技術論的接近と鋭く対立している。著者が鋭く批判しているように、ウェーバーの亜流が、ウェーバーのある部分を、歴史をおして吟味することなしに、おしいただくのを見るとき、ウェーバー自身を相対化する著者の見方には、ウェーバーの業績を積極的に生かすためにも不可欠の手続きであると思われる。

著者はこのように、ウェーバーを、ウェーバー自身が育った歴史学派との相克(相対化)をおしすすめたという意味ではその徹底、認識の主観化という意味ではそこからの転換)の中でとらえている。しかし、著者は必ずしも明言しないが、その論述の影に立っているのはマルクスである。その意味で、著者の中で、ウェーバーが真に相克しているのは実はマルクスではなからうか。著者がウェーバーの思想を「最高度のブルジョアの達成」とするとき、あるいは、ウェーバーの創った「類型」概念そのものの存立の根拠を問うとき、われわれはそれを感じとる。

かくて本書は、最高のブルジョアの達成としてのウェーバーの思想を明瞭に浮かび上げせ、したがってその限界をも同時に浮かび上

らせる。だが、ここまではネガティブな分析である。著者の意図が、(そして方法論にぬきさしならない関心をもつものすべての意図が)ウェーバーをこえること、「あたらしい方法論の中に、ウェーバーの方法論によって汲み取られた真理が止揚されたかたちで生かされること、であるとすれば、残されたことは、ポジティブに、ウェーバーを克服するそのしかたをさし示すことであろう。しかしながら、それは、むしろ方法論プロパーの問題としてなされることではないのかもしれない。

さいごにもう一度、著者の警告を引用する。「ウェーバーの亜流が、技術的な命題しか展開できぬこの方法論の結論を、十分な自覚なしに採用しながら、それでもってあたかも実践的・政策的な命題を提示しようかのような錯覚におちいつている。わたくしは、技術論と実践論との本質的な相違を抹殺して、ウェーバーの方法論から実践的命題への橋わたしが可能であり、また理念型的な理論を研究することが、やがて実践的命題につながってゆくと考えるような人たちの立場を、技術論的類窟と名づけて、するどく批判しようと思

うものである。(二三頁)

ウェーバーをとおして、経済科学の方法を学ぼうとするものは、先達の切り開いた道を一度は学ぶべきである。(ミネルヴア書房・一九三九年九月刊・B6・二六二頁・五二〇円)

——野地洋行——

内田義彦・宮崎義一
小林昇・宮崎犀一 編

『経済学史講座』I

——経済学史の基礎——

近ごろ多くの講座類が刊行され、学界の問題整理に役立つようであるが、その傾向が経済学史という非常に地味な研究分野にまで及んできたことには驚きを感じ、編集者の本来の意図とはことなつたコマーンヤリズムの浸透を併せ感じさせられる。しかし、内田義彦氏の緒論にもあきらかなとおり、戦後の経済学史研究が今日一つの転換期・反省期にさしかかっていることも確かなことであれば、この講座刊行も意義のあることであらう。

たしかに戦後経済学史は、戦前・戦中の経済学あるいは社会科学に対する権力の圧迫をはねかえし、真の社会科学の建設のための方途として研究が進められたことは否定出来ない。しかるにこの二・三年の間に、かつての経済学史研究者から学史研究の意義や方法について数々の再検討がなされるにいたり、戦後の一貫した方法に強い反省がこころみられざるを得なくなつてきた。その中心は、経済科学のうちで、経済学史がいかなる地位にあり、また、いかなる現代的意義を有するかという点にあるといえよう。しかしそれに対する答えはいまだに出されていないというのが現状である。本講座にも、経済学史を「現代」の社会科学の把握への一方途とみなしていることが明示されているように、経済学史を単なる経済学の古典の研究に終らせないということは学史研究家の間の共同の認識であるかもしれない。したがって問題を一八世紀後半以後に独自の科学としての歩みをはじめた経済学を編年的にとらえるだけでなく、世界的な今日の問題状況に古典を投げ込むという無理をすることで何らかの学史研究の「一本の赤い糸」を求めようといわれているように

ある。従来、古典学派中心の学史、あるいは重商主義→古典派→マルクスというコースが学史研究の主流にあつたことを考えると、この講座が現代資本主義を直接みつめながら編まれているという点こそ評価されてしかるべきであらう。この第一巻も、小林昇・水田洋・吉原泰助・内田義彦・吉田洋一・橋本比登志・真実一男・溝川喜一・南方寛一の諸氏による重商主義から英国の新古典学派までという広い対象が選ばれ、それぞれに、それぞれことなつた方法でのアプローチがなされている。しかし、J・S・ミル以後の分析はまだまだ問題を摸索する段階であり、古典派以後の学説の取扱の方法的未確立を物語っているという感じをまぬかれないのである。

経済学史が、独自の一科学として肯定される立場を守るならば、あらゆる経済学説に歴史科学的照明をあてなければならぬ。その意味でこの講座のねらいは重要であるが、この講座の思想として何がでてくるのかにわれわれは期待したい。(有斐閣・一九六四年五月刊・A5・三〇六頁・六五〇円)

——飯田裕康——